

4. 広島県立広島第一高等女学校 I

1941(昭和16)年4月1日、広島県立広島第一高等女学校と校名が改称された。この年12月真珠湾奇襲により日本の開戦が宣せられ、緒戦の成功はめざましかったが、1943年2月のガダルカナル敗退以来戦局は逆転していった。

すでに日本の教育は満州事変以来戦争の影響をうけつつあったが、ここに戦時下体制は深まり、1941年国民学校令が公布され、1944(昭和19)年学徒動員令に至って、学徒は遂に学業を放棄し、軍需生産のため労働力要員として動員されることとなった。

1945(昭和20)年8月6日広島への原爆投下により、本校は297名(生徒277名、教職員20名)の犠牲者を出したが、堪えて粘り強く不屈の精神で立ちなおってゆく。敗戦を機として日本の教育もまた急激な価値観の転換のうちに大きく変わっていった。



1936(昭和11)年ころの県女付近

1. 誇り高き第一県女

すでに40年に亘り築かれてきた伝統の県女精神は、「親切・辛抱」「忍耐強く粘り強く頑張る」ことにあり、優美な気風と卓抜した資質を自負した生徒の気概は、第一県女になっても変わることはなかった。

始業の鐘が鳴ると生徒は黙想して静粛にし、私語する者もなく、向学心に燃えて授業や宿題に取り組んだ。規律正しい生活で、上級生は下級生の横範たるべく努力した。

第一県女は広島県の子供小学生にとっても、保護者にとってもあこがれの的であった。広島市及びその周辺郡部を中心に、名門を慕って県外からの入学もあった。



1941(昭和16)頃の裁縫の授業 食糧増産のための校外園

2. 戦争遂行の教育

日中戦争から太平洋戦争に向かおうとする緊張が高まる中で、1941(昭和16)年8月8日文部省は訓令を発し「学校報国隊の編成」を指示した。本校でも訓令に先立つ4月15日全校生徒が講堂に集められ、勤労報国隊の結成が宣言された。報国隊の活動は勤労作業、諸訓練と従来の校友会活動とが組み合わされたものであった。

1943(昭和18)年の中等学校令公布と共に「高等女学校規程」が制定され、修業年限は四年となり、知力体力精神力を一体とする錬磨育成を目指す教科に変わってきた。教練・修練は強化され、英語は“敵性語”として排斥され軽視されるようになった。



慰問袋作り 銃剣を持つ生徒

(1)八木の修練道場

1941(昭和16)年6月,八木梅林駅近くに保護者会幹事の中田健次郎氏が私財を投じて,八木修練道場を完成させた。「宿泊訓練,集団生活を通じて…規律・従順の団体的精神を修得せしめ,困苦欠乏に堪え得る美風を馴致し,剛健なる心身の鍛練に努め,以て皇国の負荷に堪えうる日本女性の錬成を行わん」目的であった。クラス別に交代で二泊三日の生活訓練をもった。主たる内容は,教職員の講話による精神修養と,開墾・作付けによる食糧増産のための勤労作業であった。



修練道場における夕の朗読

(2)動員体制の強化

1943(昭和18)年6月政府は「学徒戦時動員体制確立要綱」を発表し,戦技訓練,防空演習を徹底し,女子については戦時救護の訓練を要請した。10月「教育に関する戦時非常措置方策」で,勤労働員は「教育実践の一環」となり,1944(昭和19)年2月「決戦非常措置要綱」で,中等学校程度以上の学徒は「必要ニ応ジ」動員されるようになり,「国民即戦士ノ覚悟」が要求された。次いで3月には学徒の通年動員が指令され,学徒は学校に決別して続々と軍需工場へ動員された。

第一県女においても,被服廠や大河の兵器廠への勤労奉仕はすでに1941(昭和16)年頃から勤労報国隊の教育活動として実施されていたが,1943(昭和18)年秋からは女子の動員も強化され,出汐町の陸軍被服廠に通うことになり,軍服の裁断,ボタンつけなどを手伝う作業をした。

1944(昭和19)年6月,五年生は広の第11空廠へ通年動員として派遣され,四年生はそのまま被服廠となった学校でミシン踏みに従事した。

1945(昭和20)年3月,四年生は鉢巻きをしたまま空襲におののきながら卒業。殆どの生徒が補習科生として残り,機械と共に安佐郡川内村に行き被服廠川内工場の作業に従事した。三年生は広島印刷と高須の広島航空に分かれて作業し,二年生もこれに従った。四年生は東洋工業と広島航空の作業であった。新一年生は建物疎開作業と学校での授業とに行き来していた。



勤労奉仕作業(兵器支廠) 被服支廠の煉瓦倉庫(戦後は教室になった)

広島県立第一高等女学校 I おわり